

以前から小学校に出向き、国語の授業を参観する機会があった。授業後の協議の中で、子どもたちの語彙が少ない、子どもたちの生活経験が足りないといった主旨の発言をする先生がいる。それはそうなのだが、そんなことは当たり前のことである。最初から、そのことを踏まえて国語の授業をするべきである。語彙や経験が少ないのは、子どもたちのせいではない。どうも、国語の授業がうまくいかない原因を語彙と経験に求めているように聞こえてしまう。

小学1年生入学時の語彙量は、多い子で7000くらいである。平均は、その半分程度である。少ない子になると、平均の半分程度ではなかろうか。子どもの語彙量は、家庭環境に大きく左右されることが、各国の社会調査で明らかになっている。言葉は、基本的に、身近な大人との会話や大人同士の会話から、経験込みで受け継ぐものである。だから、子どもの努力だけでは、なかなか増やすことはできない。

語彙が少ないと、先生の話に集中したくても、先生が何を話しているのか理解できない。少しぐらい知らない言葉やわからない言葉があっても、言葉の意味を予測しつつ、聞いて理解しようとする。しかし、わからない言葉が多くなると、理解は曖昧になってしまう。もはやチンプンカンプンである。

子ども本人の力では、なんともしようがないスタート時点での格差を是正することは、学校の重要な役割のひとつである。生活語彙が不足すると、各教科特有の学習言語の獲得に支障が出てしまう。そのため、そのところは学校で補う必要が出てくる。

幼稚園や保育所の先生が、絵本の読み聞かせや童謡を歌う。歌いながらお遊戯をするといったことで、体から語彙を獲得させることはとてもよいことである。小学校に上がっても、中学年までは、学校の先生やボランティアの方などが、絵本や児童書を読み聞かせたり、国語の教科書を音読したり、みんなで歌を歌ったり、劇をしたりする時間を十分に取ることが語彙の獲得には有効である。

似たようなタイプの絵本だけでなく、図鑑など科学的な読み物も入れると、さらに語彙が広がる。最初は2、3冊、先生が候補を挙げて「今日はどっちを読んでもほしい？」と聞いてみるとよい。複数の選択肢から選ばせると、子どものやる気や関心が高まることが認知心理学の実験から知られている。

そのうち、どんな絵本や図鑑を読んでもほしいか、子どもたちがリクエストするようになったら楽しいクラスになるだろう。